

ネガティブ・ケイパビリティの受け取り直し

秋山 知宏

要旨

本稿は、2018 年 1 月から同年 3 月におこなった己事究明に基づくものである。本稿は、私自身の経験を題材としているが、万人のために作成した教材である。所々で問いを投げ掛けている。私は己事究明によって、一人ひとりがネガティブ・ケイパビリティという「負の経験価値のもつ潜在能力」を秘めていることに気づき、その可能性の広がりを実感した。負の経験価値を受け取り直してその潜在能力を引き出せば、自律的良心¹⁾に気づいて肯定的かつ前向きな未来志向になることができる。それでもなお、自我（エゴ）は残る。それゆえ、日々新たに受け取り直しをして自律的良心を自覚し、自分に寄りかかる我執化の雲を抜き²⁾、則天去私の主体道を実践していくことが重要である。

1. はじめに

自分はこれまで良心に従って素直に生きてきただろうか。私は自分自身を良心の人だと思っていたが、己事究明の結果、そうではなかったことに気づいた。同時に、一人ひとりがネガティブ・ケイパビリティという「負の経験価値のもつ潜在能力」を秘めていることに気づき、その可能性の広がりを実感した。負の経験価値の受け取り直しをしてその潜在能力を引き出せば、自律的良心に気づいて肯定的かつ前向きな未来志向になることができる。それでもなお、自我（エゴ）は残る。それゆえ、日々新たに受け取り直しをして自律的良心を自覚し、自分に寄りかかる我執化の雲を抜き、則天去私の主体道を実践していくことが重要である。

本稿は、私自身の経験を題材としているが、万人のために作った教材である。所々で問いを投げ掛ける。読み進める過程で、「私にはできない」と思ったり、反省したりするかもしれない。それは読んだ直後だからである。私は、この教材を作る過程で、何度も反省することがあった。ところが、反省はエゴイズム（我執）を強化することがある。なぜなら、「反省している」と言う時には、その中身を深掘りされるのを嫌がったり、自分自身を変えたくなくなったりする場合があるからである。自分自身を責めて苦しめる場合もある。そういうわけで、本稿では、反省ではなく、受け取り直し（キルケゴール, 1983; キェルケゴール, 2010）を強調したい。己事究明によって己を受け取り直せば、すなわちそれらの経験を今後にどうにかすることができるかと問えば、肯定的かつ前向きな未来志向になることができる。自分に寄りかかる我執化の雲を抜く一歩を踏み出すのは、恐いと感じることもあるし、勇気が要ることもある。それは自力でやらなければならないことであるから、大変かもしれない。けれども、それを助けてくれる仲間がいる。誰でも我執化の雲を抜き、世界に己を開いていける。我執化の雲を抜いていくと、それまでよりも楽になり、毎日が楽しくなる。自分でまだ気づいていない深いものがあることを、やがて実感することだろう。

2. 幼少期から青年期

幼少期の私は、両親や祖父母から、良い子だと言われ続けて育った。オオイヌノフグリや、「野に咲く花のよう」という歌が好きで少年だった。母から叱られた記憶はあまりない。母は常に優しく見守ってくれる存在だった。父親はしつけには厳しかった。例えば、茶碗を持たずに食べたり、肘をついて食べたりすると、食卓をひっくり返す勢いで叱りつけた。しかし、「勉強をしなさい」などとは一言も言わなかった。父はそのことを

誇りに思っている。

では、「良い子だ」と言われ続けると、どんな子どもに育つか。確かに、他者や世間に対する良心は育つかもかもしれない。これは他律的良心と呼ばれている。これが自律的良心にまで深まればいいのだが、私の場合はそうはならなかった。当時は気づかなかったが、いつしか「こうしていれば良い子に振る舞える」と学習し、叱られないように世間の顔色を伺って生きるようになっていた。そして次第に「悪事を働いても人に気づかれなければ、叱られないはずだ」と考え、悪知恵が働くようになった。私が働いた悪事（良心の不作為）を列挙すると切りがない。

この経験を受け取り直すと、何に気づくことができるか。良い子、良い生徒を演じていたということは、実はA型ピラミッド構造の呪縛だったのだ（図1）。世間で言う「良い子」「良い生徒」という呪縛に囚われていたということである。親や先生など周囲の人たちの価値観の枠組に自分をはめて、形式的に生きていたということである。このことを受け取り直すと、「型に囚われて中身がなければ、何の意味もない」という気づきが得られる。

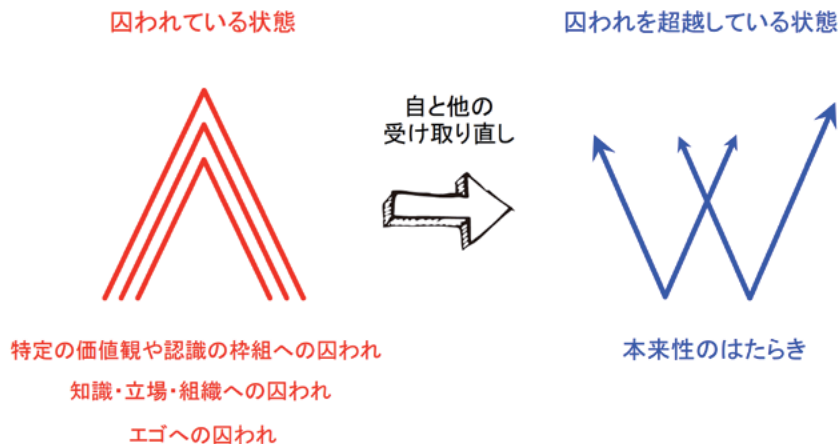


図1. 囚われている状態（A型構造）と囚われを超越している状態（W型構造）の概念図。

これは、紀元前6世紀から後1世紀にかけて世界各地で起こった精神革命における気づきと同じことである。精神革命は、人間が自然に働きかけて物をつくっていくという変革ではなくて、危機の時代に直面した人類がはじめて経験した心の中の変革である。精神革命はギリシア、インド、中国、イスラエルの四つの地域で並行的に起き、そこでの人間の生き方の普遍的原理（原則）が求められるようになった（伊東, 2016a; 2016b; 2017a; 2017b; 2017d）。ギリシアでは、「プシュケー」（魂）の発見にはじまり、その対象としての「イデア」の認識を経て、ついに「善」のイデアに至った。中国では、周時代の「天」が地上に引き下ろされて「道」となり、孔子の儒教においては、それが「礼」となり、その「礼」の根底としての「仁」に至った。孔子曰く、「人にして仁ならずんば、礼を如何にせん」。つまり、「礼（礼儀）と違ってさわりでもその根底に仁がなかったら何になる。仁がなければ礼を尽くしたとしても形式的で無意味だ」ということである。インドでは、「苦」の問題に発して、その苦のもととなる執着の対象が実は常に変化する実態のない縁起つまり「空」であることを自覚し、そこから「慈悲」に至った。古代イスラエルでは、律法（トーラ）が重要であったが、これが次第に形式化されていた。イエスはそれをアガペー（愛）に変えた。「もしもアガペー（愛）がないなら、形式的な律法なんていくら守ったって何にもないではないか、そんなものは習慣でやっているだけだ」と言い放った。当時は律法を守っているかと監視されていた。「でも、お前達は律法、律法と言うけれど、何のためにやっているのだ」と言い放ったのである。これは根本的な問いである。このような心の中の根本的な変革が精神革命なのである。

(伊東, 2016a; 2016b; 2017a; 2017b; 2017d). こう考えると、自分の中に孔子がいてイエスがいるのではないかとさえ思えてくる。しかし、これは 2,000 年以上前の気づきである。

では、さらに受け取り直したらどうだろうか。型に囚われていたことを受け取り直してみよう。そうすると、「型に囚われていなかったら、どんな可能性があるだろうか」という問いになる。もしかしたらものすごく大きな可能性を持っているのではないかと思えてきまいか。そう思ったら、わくわくとしてくる。なぜかと言うと、その呪縛をといたら、真に良心の人になれる可能性が見えてくるのではないか。さらに言えば、「良い子」「良い生徒」「良い人」という認識を持ちながらも悪事を働いてきた人たちは、それだけ広くて深い良心が潜在的に育っているはずだから、もっと可能性があると言えるのではなからうか。子供から大人まで、一人ひとりがこのような可能性を持っている。大人であっても遅くはない。自律的良心に気づいたら、これからどんどん我執化の雲を披いていける。これは楽しいことである。

3. 十九歳の頃の臨死体験

この可能性に気づききっかけを、私は 20 年前に頂いていた。気づかせてくれたのは、亡くなって 3 年 2 ヶ月が経ってからの祖母であった。私は 19 歳の大学生だった頃、車の自損事故を起こした。気絶して意識が戻ったのは、病院のベッドの上だった。意識が戻って歩いて帰宅し、程なくして事故の重大さを認識した。両親からも警察官からも「普通なら、死亡していてもおかしくない位の事故だった」「こんな大事故でよくも軽症で済んだものだ」と聞いた。後日、同乗していた友人 3 名も含めて、大学から呼び出され、全員の退学の可能性が示唆された。友人は幸い軽傷で、一緒に謝ってくれた。今でも良い友だが、その時は「ああ、人生の終わりだ」と思う日々だった。一ヶ月ほどしてか、母がこんなことを言った。事故が起こったまさにその時、「おばあちゃんが私の夢枕に立って『葬式はしなくていいよ。大丈夫だよ』と何度も言っていた」と。その話を聞いてすぐに「おばあちゃんにいのちを救われた」と感じた。同時に、自然と次のような情動が湧いてきました。「一度死んだ身なのだから、世の中のために生きよう。それが使命だ」と。

私のこの経験は、「臨死体験」と呼ばれるものの一種で、盛んに研究されている。多様な臨死体験が報告されているが、顕著なものには体外離脱である。臨死体験の真正性は統計的に有意であるとみなされるようになっていく。臨死体験のメカニズムも、量子力学、場の量子論、素領域理論を拡張することによって、仮説が立てられるようになってきた。臨死体験後に起きる変化も詳細にまとめられている。その中には、死後の世界の確信、生命への尊敬の念の強まり、他者への思いやりの増大、死の恐怖の克服、自己超越、意識の生まれ変わり（輪廻転生）の確信、サイキック能力の開花などが挙げられている (Moody, 1975a; 1975b; Ring and Valarino, 1998)。

この経験を読者と分かち合いたいが、どうしたら分かち合えるだろうか。「今夜死ぬかもしれない」、そう思って生きてみてほしい。間もなく死ぬ自分を意識すれば、他人を出し抜くとか、勝つとか負けるとか、そんなことはなんの意味もなくなる。間もなく死ぬ自分を意識すれば、自分が生かされていることへの感謝の気持ちだけになる。今まで死に直面した人たちの多くが、この感覚を実感してきたはずである。こう考えると、この地球に生きた名も無き人たちが、自分の中にいるようにさえ思えてくる。当時私は、置き忘れてきた本当の自分の心を、見失っていた自分自身を取り戻した。私の〈昇ってゆく生き方〉はようやく終わり、それからしばらくは〈降りてゆく生き方〉(秋山, 2015) だった。

4. 健全な未来をつくるための〈統合学〉の探究

それからは、運命としか言いようのない、数々の出会いが続いてきた。先ず、臨死体験の直後に、レスター・ブラウンの「誰が中国を養うのか?」という本を読む機会を得て、中国の水不足に起因する〈世界の食糧危機〉に大きな問題意識を持ち、水文学という分野の学者の道を志した。当時の指導教官に人つなぎをして頂き、おかげをもって、修士課程と博士課程には、実際に中国で約 2 年間に渡って調査する機会を得た。その後も、様々な学際的研究プロジェクトに携わることができ、20 年間に渡って、アジアやアフリカなどで調査研究をし

てきた。

学際的研究（超学際的研究）とは、異なる専門分野の研究者（あるいは異なる立場の人たち）が、一つの研究目的を共働して追究することである。博士号を頂いてしばらくして、従来の学際的研究では駄目だと思った。なぜか。従来の学際だと、例え何人集まっても、それぞれの分野の A 型ピラミッドの知識構造でみるから、お互いがいくら協力³⁾しても、本質的な繋がりが見えないからである。本質的な繋がりが見えたように思っても、その繋がりは大抵深くない。然らば、一人ひとりが自分自身を深く掘り下げ、幅広い知見と経験をもった上で、共働していこう。そうすれば、深い洞察は得られるはずだ、私はこのように考えていた。

そんな矢先に榎根勇先生に出会い、〈統合学〉を知った。「自分が目指してきたことは、統合学だったのか」と気づいた。榎根先生は、水循環という概念と理論を精緻にした世界的に有名な水文学者である。「水と女神と風土」という著書に代表されるように、若い頃から幅広く研究を進めてこられた。晩年は、環境問題の発生しないような「次なる社会システム」の構築を目指して、その基礎となりうる「新しい知」を探っていた（榎根、2006）。そして、「統合学としての新しい環境学」をまとめて退職された。退職されるときに、榎根先生から免許半傳を頂いた。それには次のように書かれている。「貴殿ハ拙者ノ下ニテ一年間学ヲ志ス者ノ心構ヘニ就イテ学バレタ。免許半傳トス。半傳ハ皆傳ヘノ道半バナリ。学ノ成就を期ス。平成二十年三月十八日。」そして、「これからの統合学は、君に任せ」と仰って頂いた。

榎根先生を訪ねることは今でもあるが、それからは自分との闘いだった。〈統合学〉という言葉を使っている人が、世界にほとんどいなかったからである。まだ確立されていない〈統合学〉を基礎づけていくために、本や論文を徹底的に読み、新しい知や行動を実践している方々の集う場に積極的に足を運び、いくつかの論文や著書を出版してきた（例えば、Akiyama et al., 2012; 秋山, 2015; 2016）。その過程で、幸運なことに、学術界・産業界・宗教界・政界にわたって、身に余るご縁を頂いてきた。しかし、その一方で、〈統合学〉についての私の取り組み方と〈統合学〉の方向性について、5名の方から優しくも厳しい御言葉を頂いた。2017年7月末に東京大学を退職してからのことだった。

「それは観念論ですね。宗教的实践を伴っていません。秋山先生は伝教大師のような人ですね。執着している。行き着くところまでいってしまっていますね。今、仏様からチャンスを頂いているのだから、考えずに従って。」

「疲れている。自己との対話を始めたら、文字にしたり、言葉にしたりすること。単語だけでもいい。誰に伝えたいかを意識すること。相手が全体になってしまっている。内部対話ではだめ。人に伝わる言葉をどう伝えるのかのワークもやったらいい。行間を読ませないということは、例えば有難うと言う時に、誰もそれを疑わない。感謝することは良い気が出る。同じ価値観の人を探しているから見つからない。自分の癖です。」

「その偉大なる学問の志を担うに足るだけの人間的な器が備わっていない。」

「本をあれこれ読むだけをやっていても自信を持ってない。一度禅をやってみれば、そこから自信を持てる。それも方法論にしてしまえばいい。」

「そのやり方では、身体を溶かしてしまう。何かを成し遂げる奴の目をしていない。頭でっかちにせずに実践もするといい。」

御言葉の真意をつかみきれず悩み苦しみながら向き合ってきたが、己事究明によって、ようやくその真意に気づくことができた。一つは〈統合学〉という呪縛に囚われていたということである。〈統合学〉は健全な未来をつくるための学問のはずなのに、無意識のうちに〈統合学〉の基礎づけに執着していたことに気づいた。つまり、一所懸命に〈統合学〉を基礎づけていくうちに、〈統合学〉しか見えなくなってしまっていたのであった。自分で〈統合学〉の論理をつくって、その枠にはまっていた。この経験を受け取り直すと、何に気づくことができるだろうか。「道を志したはずでも、手段が目的化して、術におぼれることがある」ということである。では、どうすればいいのか。「志を持った時の初心に返ればいい」ということになる。何のために学校に行っ

ているのか、何のために就職したのかなどである。学問の場合なら、「知識は何のためにあるのか」という問いになる。知識は手段である。知識は、志や目的を実現するためにあるのである。歴史を紐解けば、知識は、出世するための手段や、自然や人を支配する手段にもなってきた。そういうわけで、伊東俊太郎先生は、知と徳を根本的に一致させなければならないと仰る（伊東, 2017a; 2017b; 2017d）。

では、〈統合学〉を手段と受け取り直したらどうだろうか。自律的良心をつなぎ手とすれば、知と徳だけでなく、行いも合一できるではないか。もっといえば神仏とも合一できるではないか。なぜかと言えば、自律的良心を根本に置けば、良く生きるために知識を得て、それを使って実際に行動していくはずだからである。そして、神や仏、敵や味方だけでなく何から何まで対立せずに自分自身を開いていこうとするはずだからである。しかも、一人ひとりにその可能性があるとなれば、皆が合一できることになる。「どうしたら知と徳を根本的に一致できるか」という学問的問いから出発しても、その枠に囚われなければ、どんどんと己を開いていけるようになる。

それぞれのA型ピラミッド構造（図1の左）で見ていると本質的な繋がりが見えなくなるが、何のためにやっているのかを問い直したら、全てが合一してくる。そもそも物事の現実をよく見れば、統合的であって、合一しているとさえ思える。それを人間が勝手に分けて考え、分けて行動しているだけである。その意味では、分離分断をしたがる近代の病と言ってもいいと思う。

私は再び〈分裂病〉⁴⁾にかかって、本質的なことを見失ってしまっていた。優しくも厳しい御言葉をくださった5名の方々は、〈統合学〉という呪縛から私をほどいてくださった。これまでは無意識に知識に偏った基礎付け作業に執着していたが、これからは「統合学は手段なのだ」⁵⁾ときっぱりと割り切ることができる。おかげをもって、〈統合学〉と言わずとも健全な未来をつくる道はあるのだと気づくことができ、久しぶりに無知の知になることができた。そして、虚心坦懐、とことん開いていけるようになってきた。無知の知の重要な意味のひとつは、開いていけるようになることであると考えている。

5名の方々から頂いた御言葉を受け取り直して得られる気づきが、もう一つある。あまり意識していなかったが、傲慢になっていたということである。志の高い方々から支持を得ることによって、自信をつけ、「自分が世の中を変えるのだ」と傲慢になっていた。「聖人になる」と口にしていましたが、その中身は聖人の道ではなく、傲慢の道だったことに気づいた。この経験を受け取り直すと、何に気づくことができるだろうか。自分の中のエゴ（小さな自分）が、自律的良心（自分自身のもっと深い一部；大きな自分）に気づいても、日々修業せずにいると、再び〈分裂病〉に戻ってしまうということである。私は臨死体験をして、確かに変わった。しかし、いつの間にか〈分裂病〉に戻ってしまっていた。継続が難しいことを示唆している。その瞬間に気づいたとしても、それはまだ意識に昇ってくるレベルである。小悟と言ってもいいと思う。日々の生活に追われると、組織の論理をはじめ、様々な呪縛に囚われていってしまう。だから、自律的良心を継続するためには、日々の自覚と実践が重要である。自分自身が絶えずその覚悟をしていかねばならない。〈統合学〉を探究すること自体が修業だと思っていたが、そうではなかった。だから、このことに気づいて以来、受け取り直しを毎日続けている。これも修業の一つなのである。

では、さらに受け取り直したらどうだろうか。傲慢になっていたということは、心が腐敗していたということである。この経験を受け取り直して、「腐敗した人にも可能性がある」と考えたらどうだろうか。なぜ可能性があると言えるかという、腐敗と発酵は実は同じことだからである。映画「降りてゆく生き方」の台詞に次のようなものがある。「日本酒というのは、お米を発酵させることでできます。人間にとって有益だったら発酵と呼ばれ、有害だったら腐敗と呼ばれます。自分のもの、自分のお金、自分の成功、『自分の』『自分の』という我欲は腐敗を招きます。けれども、その道をとことん体験して、はじめて腐敗にいき当たって、発酵の大切さが分かる人も必ずいます。良くなるために悪くなることがあるということを、忘れないで欲しいのです」。これがネガティブ・ケイパビリティ（Margulies, 1984）なのである。

ネガティブ・ケイパビリティとは、負の経験価値のもつ潜在能力のことである。負の経験という自覚がある場合もそうでない場合もある。自覚がある場合にはその経験を受け取り直せば、また自覚がない場合には〈良心の不作為〉と捉えてそのことを受け取り直せば、自律的良心に気づき、自立した人生を歩んでいくことがで

きる。負の経験をもっていない人なんていないはずである。負の経験価値を受け取り直してその潜在能力を引き出してあげれば、一人ひとりがより前向きな人生を生きられる可能性がある。

満員の駅の人たちを想像してみしてほしい。一人ひとりが己を開いていったら世界はどうなるだろうか。非常に前向きな未来を想像できるのではないかと思う。ところが、〈ネガティブ・ケイパビリティの受け取り直し〉のもつ可能性は、駅がひっくり返るくらいのレベルではない。孟子は500年に一度聖人が出現するという500年周期説を説いた。万人の生き方が変わり、万人が聖人になって生きていくイメージを持てるのである。だから、これは大革命だと言えるわけである。がらりと変わるイメージを共有できただろうか。

5. 〈ネガティブ・ケイパビリティの受け取り直し〉がもたらし得る世界

ここからは、〈ネガティブ・ケイパビリティの受け取り直し〉のプロセスの一例を示したい。ここでは、7つの軸、すなわち理念、作為、時間、人間、空間、超作為、世々代々の順に取り上げる。

(1) 理念

まず、己事究明によって囚われや拘りを捨てて、意識を一旦〈白紙化〉させる。すなわち「無知の知」の状態になる。その上で「自分の志は何か」を問うてみよう。もし人類が白紙の状態だったら、何を目指すのか。

私は、自分自身を開き続け、「世々代々の幸福のために、どこまでも己を開き続ける文化」を共につくりたいと思う。

(2) 作為

次に、その理念を実現するために、どのような実践を行なっていくのか。ここで、ネガティブ・ケイパビリティを発動させるために、「自分のネガティブ・ケイパビリティは何か」と問うてみよう。

私の場合には、既に述べたように、学者として負の経験がある。そのことを受け取り直せば、「ああ、そうか、学者として負の経験があるということは、世の中の学びを囚われないものにしていけるということか」といった気づきを得ることができる。

では、学びをどう変えていけばいいのか。現在の教育の課題は何か。この問題をネガティブ・ケイパビリティの視点で考えると、現在の教育が目指していることは知識レベルのポジティブ・ケイパビリティの養成である。ポジティブ・ケイパビリティとは、例えば、問題を解決する能力である。これ自体は重要だが、問題は、現在の教育が知識レベルのポジティブ・ケイパビリティに囚われていることである。〈生きること〉や〈生きる目的〉を問う教育がほとんどない。このため、多くの知識を効率的に獲得することが肯定されるようになっており、知識の多寡を指標として競争が行われ、A型ピラミッド構造が作られている。現在の教育は、手段であるはずの知識を教育することで、教育の本来の目的を忘れてしまい、結果として〈分裂病〉の人を養成し続けていると捉えられる。〈分裂病〉の弊害は、数えきれない。信じがたいかもしれないが、知識レベルのポジティブ・ケイパビリティに囚われていると、教育者は自分自身が生徒や学生の全体性を破壊していることに気づかない。逆もまた然りである。

したがって、一人ひとりの人間の全体性を破壊することなく、自立を促していくためには、〈生きること〉を正面切って問題にする教育や〈生きる目的〉を問う教育が重要となる。その際には、ネガティブ・ケイパビリティの養成も取り入れる必要がある。私は己事究明によって、ポジティブ・ケイパビリティの発動の前提には、ネガティブ・ケイパビリティの発動がなければならないことに気づいた。ネガティブ・ケイパビリティを日々新たに発動させることが、内発的かつ自立的に生きていく道の始まりになる。このことが生きる上での軸に定まると、真如に目覚め、真如を生きる人になれる。そこで初めてポジティブ・ケイパビリティが生きてくる。このことは大乘起信論などからも裏付けられる。

(3) 時間

では、その行動指針を歴史に照らした時に、適切な行いと言えるか。

〈生きること〉や〈生きる目的〉を問うことは、一人ひとりが自律的良心に気づき、自立した人生を歩んでいくことにつながる。〈生きること〉や〈生きる目的〉を問うとなれば、自ずと万人が参加できる。しかも、今生きている人や、未来の人たちだけではなく、人類の誕生に遡って、ひいては宇宙の起源に遡って、この地球に生きた全ての先人の経験も含めて受け取り直していくことができる。そうすると、名も無き人たちの歴史が見えてこまいか。

(4) 人間

その行いは、万人に開かれているか。

新しい教育の基本原則を①どこまでも開かれ続ける公共性、②相互扶助、③マスコラボレーションとすれば、自他共にどこまでも開き続けていけるはずである。

(5) 空間

その行いを、自分のいる世界だけでしか通用しないものに押し込めてしまいか。

ここで忘れてはいけないのは、教育にアクセスできない人が多くいることである。教育現場で学ぶ人とそうでない人と間の相互作用の仕組みを考えることによって、この問題を超越することが可能である。

(6) 超作為

その行いは、自分だけに閉じてしまっていまいか。その行いには、我執が残っていまいか。ここでもう一度、「何のためにやるのか」を問うてみよう。

「自分だけが気づくのではない、皆で開くのだ、皆で自立するのだ」というような内発的な情動が自然と湧き上がることが、大乘の働きの一つの現れである。空をつかむと、自分の自律的良心だけでなく、皆の自律的良心のつながりがわかるようになる。だから、共に学び合い、共に幸せになる道を歩むことができるようになる。

(7) 世々代々

その行いは、現在世代を超えて、将来世代から見て、広がりを持ったものになっているか。道にしていくにはどうしたらいいか。

今日の我々は、〈宇宙的な連関〉の長い歴史の果てに存在している。デカルト的な機械論的世界像では宇宙は死せる延長の世界だったが、実際の宇宙は〈創発自己組織系〉である。宇宙の始まりから現在に至るまで、素粒子が結び付き、細胞が結び付き、生物が結び付き、その都度新しい関係が生成 (emergence) されてきた。そして、人間が結びつくと社会をつくり、他者との関係性の中で心が形成される。この時に重要な意味を持つのが、脳の神経系の発達、とくにミラーニューロンと呼ばれる共感能力を司る神経細胞の発達である (Rizzolatti, et al., 1996)。これはどういうことかと言うと、悩んでいる人がいるとして、それを見ている人が同情しているとすると、二人とも同じ箇所神経細胞が発火するのである。そこで共感 (empathy) ということが可能になっているのである。これも結び付きである。これは進化の結果そうなったと言える。その果てに文明ができ、我々がいるのである。

このように、生命の誕生と発展は、環境との相互作用を通じての「創発自己組織系」の展開である。これまで進化という優勝劣敗で強いのが弱いのを亡ぼしてそれに取って変わるというイメージがあったが、共生進化とはそういうものではない。それは、困難な環境に直面したときに、互いに長所を出し合い助け合って新しい発展 (新しい形態) をつくっていくというものである (伊東, 2016b; 2017a; 2017b; 2017c; 2017d; 2017e)。このような宇宙的な連関の中で、万生万物が共に生き合っているのである。人間は自然の一部であり、文化を形成し、また自然に戻っていくのである。この〈宇宙連関〉の長い歴史の中に、今日の我々は存在しているので

ある。

だから、共生の根本的な原理は、〈自然の創発自己組織的な発展を可能にしているもの〉ないしは〈宇宙連関〉と言えるのではないか。これは過去のかなるものも否定しない。伊東（2016b; 2017a; 2017b; 2017c; 2017d; 2017e）はこの〈宇宙連関〉を大和言葉で言えば、〈共生の絆〉になるという。私は〈インドラ（帝釈天）の網〉とも言い換えられると思う。〈インドラの網〉全体を光らせるには大乘の働きが必要で、大乘の働きを発動させるには一人ひとりが光ることが条件となる。この〈宇宙連関〉への全人類の回帰と一人ひとりの自律的良心が、〈横の超越〉を可能にして、これからの文明をつくっていく根源の一つになるのではないかと考えている。これは、科学の超越であり、宗教の超越であり、知と徳を根本的に一致させていくという、叡智革命とも位置づけられる。

このように考えると、本稿で取り上げたネガティブ・ケイパビリティは、〈一人ひとりの自立と他者との共生のために自然が用意してくれた仕組み〉と言えるのではないかと私は考えている。

註

- 1) 自らの心の奥底にある自己との対話によって自らを律する良心のこと。唯識や大乘起信論でいう阿頼耶識のようなもののことである。
- 2) 〈ひらく〉には、〈披く〉〈開く〉〈拓く〉の3つがある。一つは、私的な自分の我執ないしは我執化の雲を披くことである。海保青陵は文法披雲を説いた。天に則れば、披雲の方法は万法を想定できるはずであると私は考えている。第二は、自らを公に開いていくことである。どこまでも開かれた領域が公共であるとする。第三は、人がふみ行すべきことを道として、未来を拓くことである。
- 3) 本稿では、「協力」と「共力」を使い分けている。A型ピラミッド構造（図1の左）における垂直的な関係下での働き合いを「協力」とし、水平的な関係下での働き合いを「共力」としている。
- 4) 本稿では、我執に囚われて自分自身の全体性を失っていることを〈分裂病〉と表している。〈分裂病〉は、私自身の例を挙げた通り、価値観や世界観を著しく狭める。自分自身の全体性だけでなく、他者の全体性も破壊することがある。
- 5) 自律的良心に基づく内発的統合道を実践し続けることによって、統合学は自ずと基礎付けられていくと私は考えている。

引用文献

- 秋山知宏. 2015. 「存在の大いなる連鎖」のサステイナビリティ. 岩崎大, 関陽子, 増田敬祐編, 自然といのちの尊さについて考える—エコ・フィロソフィとサステイナビリティ学の展開, ノンブル社, pp. 333–400.
- 秋山知宏. 2016. 統合学の構築に向けて：統合という言葉の意味は何か. 地球システム・倫理学会会報 11: 144–148.
- Akiyama, T., Li, J., Kubota, J., Konagaya, Y., Watanabe, M. November 2012. Perspectives on Sustainability Assessment: An Integral Approach to Historical Changes in Social Systems and Water Environment in the Ili River Basin of Central Eurasia, 1900–2008. World Futures 68(8): 595–627.
- 伊東俊太郎. 2016a. 文明の転換期—人類の過去と未来. 東洋学術研究 55(1): 114–131.
- 伊東俊太郎. 2016b. 「宗教・科学技術・人間存在」中間総括. 第15回合同研究会. 統合学術国際研究所. 2016年12月18日.
- 伊東俊太郎. 2017a. 宇宙と文明の起源—我々の由来 11 「精神革命—宗教とは何か」. 伊東俊太郎先生を囲む連続談話会. 麗澤大学. 2017年2月2日.
- 伊東俊太郎. 2017b. 「精神革命」の比較思想. 第44回比較思想学会シンポジウム基調講演. 中央大学. 2017年6月18日.
- 伊東俊太郎. 2017c. 伊東俊太郎先生の生涯を語る. 伊東俊太郎先生を囲む特別談話会. 麗澤大学. 2017年7月6日.
- 伊東俊太郎. 2017d. 「精神革命」と「科学革命」. 現代倫理道德研究会. 麗澤大学. 2017年10月4日.
- 伊東俊太郎. 2017e. 「科学的真理, 哲学的真理, 宗教的真理—それらの差異と統合可能性または統合不可能性」中間総括. 第16回合同研究会. 統合学術国際研究所. 2017年12月17日.
- 榎根 勇. 2006. 現代中国環境基礎論—人間と自然の統合—. 愛知大学国際中国学研究センター, 名古屋. 134p.
- キルケゴール, S. 1983. 反復. 岩波書店. 333p.
- キルケゴール, S. 尾崎和彦訳. 大谷長監修. 2010. 受取り直し. キルケゴール著作全集 第3巻—原典訳記念版. pp. 239–443.
- Margulies A. 1984. Toward empathy: the uses of wonder. American Journal of Psychiatry 141(9): 1025–33.
- Moody R. 1975a. Life After Life: The Investigation of a Phenomenon, Survival of Bodily Death. Mockingbird Books, Marietta,

Georgia.

Moody, R. 1975b. *Life After Death*. Mocking Bird Books, Atlanta, GA.

Ring, K., Valarino, E. 1998. *Lessons from the light: What we can learn from the near-death experience*. Persus, Reading, MA.

(あきやまともひろ 京都大学大学院教育学研究科)